

小説 愛枝直
挿絵 黒澤清崇

クラファンサイトが
生真面目
すぎて

淫語性癖
を
ニドゥンさせてた
件

立ち読み版

第一章

琴宮千弦の秘密

006

第二章

放課後秘め言倶楽部

037

第三章

タイトローププレジャー

072

第四章

壊れたテープの奏であるは

117

第五章

琴宮千弦の睦言

183

登場人物紹介

Characters



ことみや ちづる

琴宮千弦

成績学年一位の優等生にして生徒会の副会長も務めている、黒髪の美少女。躰の厳しい家庭に育ち、人望も厚い箱入り娘だが、何故かデジタル機器の扱いだけは苦手。

ひろはら そういち

広原奏一

千弦と同じクラスの男子。極端な事なかれ主義者で、目立つことを恐れる性格。しかし教室でカセットテープを拾ったことがきっかけで…。

あだしの みちや

化野道也

学園の生徒会長。人当たりの良い爽やかな好青年として尊敬を集めている。奏一とは出身中学が同じの先輩。

「広原君、お借りした本、ありがとうございます」

また次の日。琴宮さんは深々と腰を折って奏一に昨日の本を差し出した。

「本当に一日で読んじゃったんだ」

読み慣れないジャンルは時間がかかるから、もつとかかると思っていたのだが。

「はい。夢中になって、三回も繰り返しちゃいました」

「多いよ!!」

奏一は学年トップの秘訣を垣間見た気がした。

「それで……どうだった？」

琴宮さんは小説の内容を思い出したのか、かあつと顔じゆうを赤く染め、

「その……すごかったです」

と意味深に答えた。

どうやらそれなりに気に入ってもらえたらしい。なんてものを読ませるんですかこの変態脅迫野郎エロ本の詰まった本棚に押し潰されて死んでください！ とか言われたらどうしようかと思っていたが、杞憂だったようだ。

「どのシーンがお気に入り？」

奏一は調子に乗って尋ねる。琴宮さんは可憐に頬を染めた。

「そうですね。やっぱり二〇六ページからの、晴れて結ばれたあとも気恥ずかしさから素直になれずにいた紗奈さんが、勇気を出して飛鳥君を誘惑する場面——でしょうか？ 『飛

鳥は驚きのあまり目を見張った。あの意地っ張りの紗奈が頬を真っ赤に染めながらも——その……っという」

奏一はぎよつとしてページを繰った。確かにある。しかも一言一句間違っていない。

「……………もしかして、覚えているの？」

琴宮さんがこつくりと頷く。学年トップは半端なかった。

ふむ、と奏一は考え込む。これは使えるかもしれない。

急に押し黙った奏一を、琴宮さんが心細げに見る。

「琴宮さん。その続き、思い出しながら読みあげてよ」

奏一はその不安を払拭するように、にっこりと笑いかけた。

「え、ええええっ!？」

目の前の少年が告げた突然の要求に、琴宮千弦は驚きの声をあげた。

可能か、と言われれば、不可能ではない。昨日はお布団にくるまって、繰り返し繰り返しページを繰った。知ってはいけない世界に触れるドキドキに、一言一句が残らず頭の中に焼きついていく。

でも、そんな恥ずかしいことをできるわけがない。だって、あの本には眩暈めまいがしそうなほど沢山の——本当に沢山のはしたない言葉が綴られていたのだから。

前後の文脈から意味を推察できたもの。それすらも適わないのに使われる漢字と音から、

はつきりいやらしい言葉とわかるもの。そして普段何気なく使う言葉が魔法のように裏返されて、突如淫らな意味合いを帯びたものまで——。

(ダメですダメですつ。あんなの口に出したら……わたし、きつと変になっちゃいますつ) 千弦はじつと縋るように彼を見た。広原君は笑顔のまま、自分の鞆を二度叩いた。

そう——テープ。千弦は少年の意図を直感する。これは仕方のないことなんです。だってわたしは脅迫されているんですから——。その脅迫というのが建前であるとわかっていながら、いや、建前とわかっていながらこそ秘めた欲求を優しくすくい取ってもらえたような気がして、千弦の心は甘美な提案に急速に惹かれていく。

「でも、わたし、あんな言葉を口にする顔、見られるなんて、恥ずかしくて、それに、もし、誰か人が来てしまったら……」

「……………そうだね。今度からは屋上とかにしよつか。とりあえず今は……………うん。琴宮さん、椅子を窓のほうに向けて座って」

それでも往生際悪く躊躇っていると、広原君は不思議なことを千弦に求めた。

理由もわからないまま九十度椅子を回して座り直す。すると、広原君は自分の椅子を千弦の真後ろに置いて、背中合わせに腰掛けた。

首筋に感じる彼の熱。椅子の軋みが伝える微かな身じろぎ。千弦の鼓動がドクンと高鳴る。

「今日はまだ、顔は見ないであげる。それに、これなら誰か来たらすぐ教えられるだろう？」

そして——ぱらりとページを捲る音。

「紗奈が頬を真っ赤に染めながらも——何？ 続きを教えてよ」

どこか意地悪な響きを帯びた声に、胸がきゅうと甘く締めつけられた。

「真っ赤に染めながらも——震える指でゆっくりとスカートをたくし上げた……です」

氣づけば千弦の唇は、小説の中の少女がとつたはしたない振る舞いを描き出していた。

つかの間、無言。

千弦の視線は吸い寄せられたように自らの太ももと——その根元を遮るスカートの裾に注がれていた。

どんな気持ちができるのでしょうか？ お慕いする殿方に下着を見せるというのは——想像するだけで胸の奥がズキズキと疼いた。両手がひとりでにスカートに向かう。千弦は慌ててその布地をきつく握ってごまかす。

「ねえ、琴宮さん、誰も見てないよ」

心の奥を見透かされたような気がした。

でも、本当にいいのでしょうか——？ だが、千弦はその問いかけの答えをもう知っていた。いいのだ。彼といる間だけは、わたしは『悪い子』になっても。震える手が、もぞ、もぞ、と這うように裾へ向かう。掴んだ生地を、ゆっくりとお腹のほうへたぐり寄せる。太ももがなぞられる感触。衣擦れの音がする。きつと広原君に氣づかれてしまった。二人きりの教室で晒した白いレースの下着は、まるで知らない誰かのもののように見えた。

そっか——わたしは今、紗奈さんなんだ——物語のヒロインと自分が同化していく。

「紗奈の大胆な行動は、それだけに留まらなかつた……。幼なじみの、こ、恋人……。は、むっちりと張り詰めた、ふ、太ももに食い込む、下着の紐を、ほどいた……。小さな布きれが、はらりと床に落ちる」

千弦はうわごとのように続きを暗唱した。途切れ途切れ、つかえつかえの音が響く。頭の中では紗奈の姿をした自分が、扇情的なストリップを演じている。

窒息しそうなほど息を詰めていた『悪い子』の自分が、胸いっぱい空気を感じ込んで、いるのを確かに感じた。

「紗奈の……。……。牝器が、飛鳥の目の前に、さ、さらけ出された……」

その解放感もつと欲しいと、千弦は淫らな物語を紡ぎ続ける。ついに、あのふしだらなところを意味する言葉を口にした瞬間には、背筋が痺れるような快美を覚えた。

だが——そこでふいに千弦の唇が止まった。

次の行は、ヒロイン紗奈の台詞だった。ここから先を口に出してしまつたら、もう自分がどうなってしまうかわからない。だってそれはとびきりエッチな言葉で飛鳥を誘う
！

「琴宮さん。大丈夫。聴きたい。聴かせて？」

その迷いさえも見抜いたように、広原君が促した。

千弦はすう、と音がするほど目一杯に息を吸った。

『ねえ見て、——すか。わたしのお、お、おま〇こ、ぐ、ぐちよぐちよ、につ、ぬ、濡れて、る……でしよつ？ もう、い、い、一週間も、あ——かの、お……おちん、ちんつ……』

……は、ハメハ、メッ、しっ、してもらえなくて、寂しい、寂しいって、泣いてるの……』
主人公の名前だけ曖昧にぼかし、台詞の一言一句すべてを千弦は上擦る声で演じた。
淫らな単語が口をつくたび、全身の肌がぞわりと粟立つ。頭の芯が甘い熱に冒され、恥じらいという感情もその輪郭がぼやけていく。

『私、素直になるから……、——か好みの、可愛い女の子、に、なるから……、お願い……今すぐここで、せ、せ、せ……セックスしてっ』

言い終えた瞬間、鮮烈なほどの媚電が身体の芯を貫いて、千弦はカタカタと椅子が鳴るほど激しく打ち震えた。

「……………つふああ♡」

詰めていた息が熱を帯びて吐き出される。両手は皺になりそうなほど強くスカートを握りしめていた。腰が重たくじいんと痺れ、露わになった下腹が甘く淫らに引き攣れた。

それでも、広原君は、まだ満足していないようだった。

「琴宮さん、続きを読んで？」

（そんな……酷いです♡ 広原君は意地悪です……♡）

「……………紗奈の申告した、とおり、彼女の……花びら、は、淫猥に……濡れ光っていた」
胸の内で甘えて詰りながら、千弦は朗読を再開した。

「春草のような……恥毛の下で、すでに、い、陰唇は、ほころび……赤く、充血した粘膜を……晒している。ヒクヒ、ク……と、蠢く……肉襷から、こぼりと濃密な、あ、愛液……が零れ、ゆつくりと……肉づきの……よい……太もも、を、伝い……落ちた」
微に入り細を穿ち描き出されたヒロイン紗奈の秘密。それを読み上げていると、意識が自然に自分の同じ部分へと向かう。まだ身につけた下着の奥で、きつとわたしの——おま〇こ——も——。卑猥な単語をことさらに用いた想念に、千弦の胸はどくんと高鳴る。
きつと、ヒクついている。きつと、潤んでいる。敏感になってジンジンと痺れて——待ちわびている。紗奈が飛鳥を求めたように。

(じゃあ、わたしは誰を——?)

その疑問を抱いた瞬間、千弦は背中越しに座る少年のことを強く意識してしまった。かあつと頭の芯が茹だるような気恥ずかしさがこみ上げ、ごまかすように再び口を開く。

「飛鳥は、無言のまま歩み寄った。そ、そして……唐突に、秘裂へ手のひらを、覆い被せ

——
だが、その先は正しく紗奈の欲したものが、飛鳥から与えられる描写で——。
躊躇い口ごもった千弦の耳に——。

『ああ、抱いてやるよ。お前が嫌って言うほどな』

不意打ちのように頭の真後ろから、劇中の少年の言葉が届いた。
まるで、本当に淫裂を触られたような気さえた。

「ひいんッ♡」

零れた嬌声は紗奈の台詞か自分のものか、もはや千弦にもわからなかった。

「……琴宮さん、大丈夫？ 続けられる？」

彼が振り返る気配を感じて千弦も首を巡らせる。少し眉をしかめた心配げな顔に、

「はひっ♡ だいじょおぶ、です。読めます……」

千弦はとろりと蕩けた笑みを返して顔を戻した。

「紗奈のひしんは、見ていたとおり、ぬちゃりとしめったかんしよくが……した。かるく

じょーげに、こするだけで、うえの、くちからは……はひっ♡ はしたない、あえぎ声が

……めすねん、まくからは、ねばつくあい液、が、とめどなくわき出る……それは、まさ

に……まさに、蜜のつぼだった……♡」

もう、止められなかった。ろれつの乱れた妖しい声で千弦は謡う。

「い、いやあ♡」

「……なにが嫌だ。こんなに濡らしておいて。それに、誘ってきたのはお前だろうが」
期待を込めて沈黙を保てば、ほんの僅か、でも確かに興奮で掠れた広原君の声。

そう、誘ったのはわたしなんだ。たった今の掛け合いのように、わたしが誘って、広原君が応じてくれた。頭の中で紗奈に成り代わった自分が、全身をビクつかせて縋る少年は、物語中の飛鳥ではなく今ここにいる彼の姿をしていた。

「——は、なじりながら、ぬかるみのげんせんへと、ゆ、ゆびを……ねじ入れた……。

——の……ちつにく、……っはあ♡ たやすく……それを、うけとめ……、きゅん♡ きゅん♡ ……と、まとわり、ちゅいて……かみたい、する……♡」

千弦は夢中になつて朗読を続ける。震える唇からとめどなく淫らな言葉があふれ出す。

「——は、かおじゅーを、まっかに染めて、ひとみに、涙を……たたえ、うれしげな、ひめーをあげる……。その艶かしさにあおられて、——は親指を……」

だが、そこまで読み進めたところで——小石を囁んだような異物感が、千弦の陶酔を僅かに醒ました。

ほんの小さなもどかしささえ許せないほど、千弦の意識は蕩けきつていた。

「ひろはらくん……くりとりす、とはおま○このどこにあるのですか……?」

子供が親に、初めて聴く言葉の意味を尋ねるような無防備さで、千弦は問いかけた。

「……ええと、女性器、いや……おま○このっ。一番上の端にある、小さな突起、かな?」

広原君が、少し自信なさげに答える。

本当にそんなものが、わたしの身体にもあつたでしょうか——? 自分の性器をまじま

じと確かめたことなどない千弦は、急に不安になつてきた。

「……触つて確かめてみたら?」

その提案に身体がビクンと跳ねた。

確かめてみたい、という好奇心。その隣に並ぶ、でも怖いと怖じ気づく気持ち。だってわたしは知っているのだ。そこを触られた紗奈がこれからどうなってしまうかを。

千弦は迷い、躊躇い——無意識のうちに片方の手をスカートから離し——。背中のほうに差し出していた。

心臓をばくん、ばくん、と強く鳴らし、祈るような気持ちで待った。

永遠にも思える刹那のあと——広原君の手が千弦の手をそっと包んだ。

彼の手は、汗ばんで、少しだけ震えていた。じんわりとした温かさといっしょに、勇気が伝って流れ込んでくるような気がした。

千弦は残った手の人差し指と中指だけをスカートから離す。下着の縁からそれを差し込み、ひくりと跳ねる下腹をなぞる。

指先が恥毛に触れた。蒸れた感触に頬が染まる。搔き分けて奥へ進める。そして——。コリ、としこった感触。

「つふあああああ♡」

全身を貫いた鮮やかな快美に、千弦はふしだらに鳴いて少年の手を強く握った。

「ひろはら、くん。ありました。わたしにも、くりとりす。紗奈さんと、同じ……♡」

「うん。……みんなと、同じ」

「……………はい♡」

千弦が予想もしていなかった、ただど確かに欲しかった言葉。幸せな気持ちが胸に弾けて、ドキドキが際限なく高まっていく。

身体が自然に求めるまま、突起に触れた指を小さく動かした。ビリビリと痺れるような

淫悦が接触面に閃き、千弦は背中を丸めて、「あうん♡」と押し殺したよがり声を漏らす。頭の中が爆ぜるような心地がするほど、気持ちがよくかった。

「……………親指を、『千弦の』、くりとりす……………♡に、当てた♡」

だから、続きを口にした千弦はヒロインの名前を間違えたことに気づかなかった。

「っふああ♡ あ……………らめっ♡ つうんっ♡ 千弦は、いやいやと首を、ふって……………淫らに、あえ、ぐ……………♡ それでも、よーしや、なく……………ぶっくりと、ぼつき……………♡ した、いんかく、を……………ねっとり、蕩けた……………ちつにくを……………みずおとが、するほど……………責めたててやると……………かのじよの、声は……………みるまに、せっぱ、つまって……………はふうん♡ かん、だかく、なつて……………つくうううんっ♡」

読み上げに詰まるごとに掠れた熱い吐息を吐き出し、火照った肌から玉の汗を浮かべ、座面に尻たぶを擦りつけるよう腰をくねらせ、千弦は自らの秘密を弄ぶ。

乱暴に翻られる紗奈とは違い、自分の指先が肉芽をなぞる動きは、スリスリと弱く小さい。それでも局部に走る快楽は生まれてから今まで一度も感じたことがないほどの強烈なもので、意識は瞬く間に愉悦の縁へと追い詰められていく。

千弦はこの感覚の名前をもう知っていた。その現象は、絶頂と呼ばれていた。オーガズムと呼ばれていた。アクメと呼ばれていた。それを感じるときヒロインはいつも――。

「ひろはら、くん♡ わたひ、もおらめですっ♡ イっ……………イキますっ♡ わたひ……………イっつちやいますうっ♡」



「痛くしてしまつたら、すぐに仰つてくださいね？」

奏一の内心を知つてか知らずか、彼女はそんなことを告げると、ぐつと前のめりになつて清麗な美貌を醜惡な肉塊へと寄せる。

そして――。

「琴宮さん、まって……あああ！」

微かに震える唇を、奏一の陰茎へ触れさせた。

熱く湿り気を帯びた未知の感触は、途方もない興奮を呼び起こし、奏一は情けない声をあげて腰を震わせる。

激烈な反応に彼女も面食らつた様子で、唇を離し、奏一の顔色を窺う。だが、そこに痛苦の色がないことを見透かすと、琴宮さんは艶やかに微笑み――。

「本当に殿方も『女の子みたいな声』、出されるんですね。とっても可愛らしかったです♡」
真上を向いた肉茎に対し、首を伸ばし覆い被さるようにして再び口を寄せた。

「っ……ぐうッ！」

くぶ、ちゅぷと、水音が鳴り、先端がねつとりと柔らかい粘膜に包まれる。自分でするのは比べものにならない強烈な官能が背筋を駆け抜け、奏一はたまらず歯を食いしばる。
「んぐっ……ひろはらくん、ちゅ、……んぶ、きもひよく、なつてくらしい……わたしひがきもちよくひていただいたのと、おなじぶんらけ……♡」

琴宮さんが奏一のペニスに舌を這わせた。羞恥に頬を染めながら、まるで失敗できない

テストに挑むような真剣そのものの顔つきで、裏筋のあたりをざらりと舐めあげ、雁首をちろちろとこそぎ、シャフトをねつとりと擦りたてる。

「ま、まって、琴宮さ、んっ。本当に、こんなことは、しなくて……っああっ！」

「しよーせつれは、ろのさくひんれも、んちゅ、いちどはコレを、なさってまひた……。とのがたは、くぷっ、んっ……おすき、なのれすよね……？ おちんちん、おひゃぶりされるの……♡」

彼女は貸した小説の描写を参考に、口戯を施しているらしかった。的確に雄の弱点を刺激しながらも、変化をつける合間合間で僅かに動きを止めたり——あまりにもさらさらすぎて、何度背中に流しても口元に戻ってくるほつれ髪に悪戦苦闘してみたり——確かに琴宮さんの動きには所々にぎこちなさが見える。だがそんな姿もまた初々しくて可愛らしくて、余計に奏一は興奮を煽られてしまう。

「ひろはりやく、んっ♡ わたひ、じよーずに、ふえらちお、れきてますか？ じゆる、んぷっ♡ おちんぼひゃぶり、きもちいーれすか？ んじゅっ、んぷっ♡」

琴宮さんはふしだらな言葉をまじえながら、瞳を揺らして尋ねてくる。

「……………ッ。……気持ち、いいよ。琴宮さん」

そんな彼女を突っぱねられるわけもなく——奏一はこくりと頷いた。

肉棒を甦る熱く濡れた口腔粘膜は、激烈な快感をもたらしてくれるし、あのお淑やかな琴宮さんがはしたなく唇を割り開いて、顎に唾液の筋を垂らしながら自分のものを舐めし

やぶっている光景は、たとえようもなく扇情的だ。そのくせ彼女はいつもと変わらず、いや、いつも以上にきゅんとなるような、健気な言葉を口にする。

気持ちよくて、卑猥で、愛らしくて、愛おしい。あらゆる角度から雄の本能を滅多刺しにされて、奏一の理性には見る間に霞がかかっている。

「ほんとお、れすか？　うれひいれす……♡　くちゅ、ひろはらくん、それは、んぢゅ……もつときもちよくなつてくりゃひゃい♡　んぐつ、んむつ、つちゅ——んぷっ♡」

琴宮さんは心の底から嬉しげに、蕩けるような笑顔を浮かべた。

彼女の口唇愛撫がまた一段と大胆になる。肉茎と陰囊にそつと手を添え優しくさすりあげながら、じゅぽ、ぐちゅといやらしい水音を鳴らして激しく顔を前後させる。桜色の唇が肉竿をぬるぬると扱ときたて、その表皮が見る間にてらてらと濡れ光りだす。

「つくあ……っ。琴宮さん……っぐ！」

そして口内では彼女の舌が淫猥にペニスをこそぎ、奏一を悩乱させる。接触面積を増やそうとするかのように裏筋側に貼りついてねりねりと擦りたてたかと思えば、じゅぶ、ぶちゅりと破廉恥な音を立てて、亀頭の表をぐるりとねぶつて見せる。

たまらないほど気持ちがよかった。愛戯を受ける肉肌はジンジンと痺れを絶え間なく発し、気を抜けば一瞬で果ててしまいうそう。狂おしい疼きは必死に下腹を締めつけて堪えるほどいや増し、限界までいきり立ったはずの雄器がさらにビキビキと持ち上がっていく。

「あは……♡　おちんちん、ぢゅりゅ、んぢゅ、おくひのなかで、またおつきき……♡」

琴宮さんはうっとり溜息を零して、いつそう熱のこもったフェラチオを施してきた。じゅぽ、ぐぽと抽送する一往復ごとに、口内に溜まった唾液が唇から零れる。白く泡立った蜜が彼女の顎を淫猥に汚し、長く糸を引きながらぼたぼたとコンクリートに落ちる。さすがに恥ずかしかったのか、琴宮さんはつかの間ペースを落として逡巡すると――。ずぞ、じゅるじゅぞぞ、と、逆に眩暈がしそうなほど卑猥な音を鳴らしてそれを啜り、ゴクンと飲み下してしまった。

「ぐああっ!!」

そんな真似をされてたまらないのは奏一だ。粘質な唾液とともに、敏感になった鈴口も吸い上げられて、陰茎が根元から引っこ抜かれそうなほどの快感が生まれた。

あまりの刺激にぐんぐんと腰が跳ねる。肉棒が勢いよく突き出され、ばんばんに張り詰めた亀頭が琴宮さんの喉奥までぐぶりと埋まり込む。

「んぐうッ! けほ、けほっ」

琴宮さんは苦しさを堪えきれなかった様子で、ペニスを吐き出して噎せ返った。

「ご、ごめん! 大丈夫、琴宮さん!!」

「へーき、です。ちよつと、びつくりしただけですから♡」

慌てる奏一に、琴宮さんはあはあと荒い息をつきながら、にっこりと微笑んだ。

「そんなに、気持ちよかったですか? わたしの……おくちま♡こ♡」

脳が赤熱するほどの興奮が奏一を襲い、肯定の代わりにビクンと肉棒が暴れた。

愛しげな視線を注いだ琴宮さんが、再び唇を寄せてくる。半開きになった奏一の腿に両手を置いて、先ほどの続きのように深く陰茎を啜えようとする。ゆつくりと彼女のペースで、だが順調に肉竿は口腔の奥へと飲み込まれていく。くぶくぶと桜色の唇が、奏一の根元へとせまり——こぢゆ、と。今度は咳き込むこともなく、琴宮さんは喉奥まで全長を収めてしまった。

「んふう……♡」

琴宮さんは満足げに目を細め、今度は唇を強く吸いつけながら、亀頭が露出する寸前まで顔を引いた。そして——また一息に先ほどの深度まで少年を迎え入れる。

「くあ……ッ！」

奏一はたまらずうめき声をあげた。琴宮さんは、なおさらそれを追いたてるように、じゆぼ、ぐちゆ、ぢゆぶ、ずちゆ、と、慎みのない淫音を奏でて限界を超えていきり立った怒張をしゃぶりあげる。

「琴宮さん、ダメだ……もう、我慢が……！」

「あまん……ひないれ……♡ ひもひよく、なつてくらひやい……♡♡ じゆるるっ」
返事をする間も、ぬかりなく亀頭を舐めまわしながら、琴宮さんは口奉仕を続けた。

肉肌を舐め、しごき、こそぎ、吸り、彼女の口器が強烈な淫悦を送り込んでくる。

奏一の腿に置いた両手はぐつと力んで、たゆたう乳房が何度となく内にも触れる。ほつそりくびれた腰に連なるまるやかに張り出した形のよいお尻が、スカートのプリーツを

ひらめかせて妖美に揺れる。

彼女の頬が真っ赤に染まっているのは息苦しさのためだけではないだろう。額に玉の汗が浮かんで瞳はうっとり潤み、鼻からは発情も露わな熱く短い吐息がたゆまず零れる。

琴宮さんも、興奮しているのだ——そう気づいてしまうともうダメだった。奏一は腰椎の奥に抑え込んだマグマがぐつぐつと煮えたぎっているのを確かに感じた。

「口、放して、もう……出ちまう……!」

奏一が訴えると、琴宮さんは口戯をやめるどころか唾液まみれの肉竿に手を戻し、顔を引いて亀頭だけをちゅぷちゅぷと吸い上げ、受け止めの態勢に入ってしまう。

「……んじゅ♡ ……はひっ、ひろはりやくんの、どろどろざーめん、ちづるのおくちま○ここに、いっぱいびゅーびゅーひてくらひゃい……っ♡」

結局——琴宮さんの淫らかな言葉が、奏一の限界を断ち切った。

「あ、あ、あ、っああああ!」

奏一は獣のような雄叫びをあげ、彼女の口内にペニスを埋めたままガタガタと腰を震わせ——。

どぐ、どぶ、ぐぶっ! と、勢いよく雄の汚濁を吐き出した。

「んうううう!? う、んぐっ……っ♡ んっ……♡」

強烈な快美が下腹を突き抜け、肉の砲身が幾度となく跳ね回る。そのたびに尿道へ圧迫感を覚えるほど濃厚なスペルマがびゅるびゅると噴きあがり、彼女の口腔を蹂躪していく。

大量に吐き出される白濁汁を、琴宮さんは眉根を寄せるそぶりすら見せず受け止めた。それどころか鈴口に舌腹を押し当てて練り上げ、さらなる吐精を促してまで見せる。

何度も、何度も。収まったと思えばまた一度。もう終わりに思ってもまた一度。こんなにも長く強い快感を覚えたのは初めてだった。射精が途切れたかと思えば、琴宮さんは追いつきのようじじゅうずりと吸い上げ、尿道の残り汁すら啜り出してしまふ。

奏一の子種を根こそぎにして、ようやく琴宮さんはちゅぽ、と唇をびっちり閉じながら、萎えかけたペニスを解放した。生暖かい口腔に包まれていた肉肌を、屋上にそよぐ夕べの風が心地よく冷ました。

琴宮さんが、コンクリートの土台にぺたんとお尻をつく。彼女の頬は、ぷっくりと膨らんでいた。あの中にはまだ、俺のものが——また性懲りもなく雄がいきり立ちそうな光景を奏一が見下ろしていると、彼女は両腕を胸元にぎゅっと縮こめて——。

ごくんと。喉元を上下させた。

(え……？ う、うわ、飲んだ!? 俺のを!?)

「広原君の、いただいちゃいました……♡ きもちよく、なっていただけでしたか……?」
琴宮さんは照れ笑いを浮かべながら、指先でそっと口元を拭いた。そして期待と不安相半ばで瞳を揺らし奏一を見上げる。

「……」

無言でこくりと頷きながら——奏一は生まれて初めて感じるような強さの喜びと、切な



さを同時に感じていた。

彼女のことを愛おしい。今すぐにも抱きしめて、奉仕を終えたばかりの唇を奪ってしまいたい。だが——それは絶対にやっちゃいけないことだ。いくら建前とはいえ奏一は彼女を脅迫しているのだから。

胸が痛くて、苦しかった。

「……広原、くん？ どうかしましたか？」

「………なんでもないよ、あんまり気持ちよかったから、ちよつと放心してた」

ごまかし笑いがぎこちなく歪んだ。

「そう、ですか。それはよかったです」

と、頬に手を当て幸せそうにはにかむ琴宮さんを見てたまらないほど泣きたい気持ちになつて——奏一は自分が恋をしていることに気づいた。テープで引かれた一線が疎ましくて仕方がないほどに。

「ですから、どうかご遠慮なさらずに。奏一さんのお好きなやり方で、奏一さんのお好きなだけ、千弦のことを可愛がってください♡」

そして彼女はそう続けると、膝の角度をそつと広げた。生白い内ももと若草のような茂みが覗く。

いつでも進んで結構ですよ——と促すような仕草に、奏一の肉器が期待で跳ね上がった。今すぐ彼女を抱きしめて、ベッドに縫いつけて、乱暴なぐらい荒々しく初めてを奪ってしまいたい。雄の本能が声高に叫ぶ。

だが——同時に溢れるほどの愛おしさが、その獣欲に待ったをかけた。

優しさには優しさで応えてやりたい。ほんの僅かでも痛みの少ない初めてにしてあげたい。この健気な恋人を大切にするために、自分に一体何ができるだろう？

考えた末に奏一は彼女の乳房からそつと手を離してベッドを降りた。

「それじゃ、千弦のお言葉に甘えて、好きなようにさせてもらおうな」

そして、彼女の腰元に跪いた。

「あ、あの、奏一さん……？」

「脚、もう少し開いて？」

「……はい」

千弦は戸惑いながら形よい太ももをさらに割り開く。奏一の目に彼女の秘密が晒される。(うわ……っ。これが、千弦の……)

下世話な感嘆を胸の内で留めておくのには、結構な忍耐力が必要になった。

初めて目にした千弦の大切なところは、楚々と清純な造りをしていた。

白妙の肌のうちでもとりわけ色素の薄い下腹。細く薄い産毛うぶげの下で、ぷにゅりと膨れた愛らしい恥丘。その最奥にかくれんぼをする童女のような、ほっそりとした姫割れが控えめに一本走っている。

厚めの肉土手に護られた粘膜は薄い桃色をしていた。僅かに湿り気を帯びて艶めきながら、恥じらうようにひくひくと震えていた。

「……触るよ？」

我を忘れてむしゃぶりつきたくなるのを必死で自制しながら、奏一は尋ねた。

彼女がこつくりと頷くの確かめ、繊細な肉唇に両の親指をかける。最大限の気遣いを払ってゆつくり左右に割り開くと、くちやりと柔らかく粘膜口はほころび、甘い香りを鼻先に伝えた。その匂いを嗅ぐだけで、陰茎がまた痛いほどに強張った。

「千弦は、こんなところまで可愛いんだね」

「あう……その、奏一さん、何をなさるおつもり——ひああ!!」

応える代わりに奏一は、彼女のそこに唇を寄せた。千弦は言葉を途切れさせ、甘ったるい悲鳴をあげた。

わななく陰唇を優しくつえばみ、舌先で縁をこそぐ。舌腹を内粘膜に押しつけてねつとりと上下させれば、ビクン、ビクン、と細腰が震える。

「い、いけませんっ、奏一さん、さすがにそれは、恥ずかし……ひあああっ♡」

「何をしてもいいって言ったのは千弦じゃないか」

「それは、そう、ですけど……うあん♡ 奏一さん、いじわるですっ、っひんっ♡」

甘えるように詰った千弦を奏一はちゅぷと柔襲を吸い上げて黙らせた。

唇で性器全体をこすりあげては、舌を回して媚肉を掻き回す。未だ処女膜に護られた膈口を傷つけぬよう優しくこじる。千弦は両手で口元を隠して、ひん♡ ひん♡ と押し殺した嬌声を漏らす。

まるでその喘ぎと連なるように、愛戯を受ける淫裂からも、とろりと芳醇な蜜が湧き出した。その甘い露をじゅるりと啜れば、千弦はひあん♡ と一際甲高くよがって、ピクピクと総身をひくつかせる。

「あふっ♡ っううん♡ わたし、殿方に、こんなこと……ああんっ♡ 奏一さん、放して……くださいっ、おつゆで、お顔が汚れてしまいます……っふううん♡」

千弦はまるで言い訳のように奏一を制止するが、彼女の腰下は切なげにくねって、官能の強さをありありと伝える。

「いいよ。口元がべちゃべちゃになるぐらい汚してよ」

頃合いと見た奏一は、スリットを広げる指先の位置を上になぞらした。クリトリスを覆う包皮がぷりゅんと剥けた。

すかさず露出した肉の真珠をちゅくとついばむ。

「っひいひいんっ♡」

千弦が盛大に腰を跳ね上げた。

「あっ♡ らめっ♡ 奏一さ……そーいちさんうんっ♡」

千弦はいいやと首を振って、奏一の頭に手を乗せる。もはや返事もせず、奏一は一気呵成に女の弱点を責めたてた。

唇でちゅぷちゅぷとフェラチオのようにしごきたて、舌先でくりくりと根元から転がす。ずずっと下品な音を鳴らして吸い、唾液と混ぜ合わせた愛液をまた塗りたくる。二人きりの部屋にぴちやぴちやと淫靡な水音と、彼女の甘鳴く声だけが響く。

「っああそーいちさん、千弦のため、なのですねっ♡ ちづるが痛くならないよおに、ほぐしていただいでるのですねっ♡」

千弦は感極まった様子で蕩けた瞳に涙を浮かべ、愛おしげに奏一を見下ろした。もはや絶頂は間近のようで、恋人は内ももがふるふるると波打ちっぱなしになるほど、細かく腰を揺すりたてていた。

奏一はトドメとばかりに姫粒へ舌腹を押しつけ、肉襞ごとねりねりときつくこね上げた。千弦の下肢が一度きり強く、ビクン！ と引きつける。そして先ほど通りへ戻ったかと思えた小さく細かいわななきが、見る間にその振幅を増していった。

「そおいちさん、わたし、イキますっ♡ そおいちさんにクンニしていただくの、しあわせでうれしくて、あたまが変になってしましますっ♡」

泣き出す寸前のような艶声で、千弦が懸命に訴える。奏一はその言葉にこの上ない愛おしさを感じながら、単調なほどにしつこく同じ舌の動きを繰り返す――。

「つあああああつ♡ イクつ♡ そーいちさんにおしゃぶりされて、おま〇こアクメしますっ♡ つああああッ♡ ツあー~~~~♡ ~~~~~♡ ……っ♡♡♡」

ついに恋人を絶頂へと導いた。

千弦は縄るように奏一の頭に置いた手に力を込めて。むっちりとし張り詰めた太ももで耳の横を挟み込み。背筋をそらして頤を跳ねあげ。甲高いよがり声を迸らせた。

きつく強張る肢体の中で、下肢だけが壊れたオモチャのようにガクガクとぶれる。押しつけた唇の中で桃色の媚肉が卑猥に蠢く。

長い嬌声を絞り出すごとに、千弦の腰つきは刻々と変わっていった。地震のような縦揺れは、ビクン！ ビクン！ と間欠的な痙攣に変わり、やがて甘やかな震えを見せるころには全身の力がくったりと抜けて、背中からベッドに身を投げ出してしまふ。

恍惚と放心する千弦はいつもの楚々とした振る舞いを忘れて、両脚を緩く外に向けたままひくひくと腹腔を跳ねさせていた。開き癖のついた彼女のラヴィアは、もう奏一の指で押さええていなくても閉じることはなかった。

「……」

奏一は余韻に浸る恋人を見下ろし、ゴクリと生唾を飲み込むと、帰り際に寄ったコンビニの買物袋に手を伸ばした。



中から取り出したものは、四角いパウチに入れられた、男性用の避妊具だった。

千弦が荒い息をついたまま、とろりとした視線を奏一に向ける。

「あ……わたしも、奏一さんの準備を——」

「それは、必要ないかな」

苦笑いで応えて下着を剥ぐ。いきり立った怒張がびたんと跳ね上がって臍を叩いた。見苦しいぐらいの昂りように、千弦は目をまん丸にして驚いた。

膝の裏に手を差し込み、千弦の脚をベッドにあげる。そのまま枕に頭を乗せて、美しい肢体を布団の上に収めてから、奏一も彼女の腰元に陣取った。

限界までいきり立っているおかげで、装着は楽に済んだ。

「奏一さん、わたしは、そのままでも……」

「ダメ。大切にしたいから……さ」

「……はい♡」

千弦は幸せそうに瞳を細めて、口元をほころばせた。

「千弦の初めて、もううぞ」

先ほどのリベンジのように、奏一はあえて力強く言いきる。

「奏一さんになめなめされて、ぐちゃぐちゃに蕩けた発情おま○こ、たっぷり愉しんでくださいね♡」

千弦は自ら両脚を割り開き、すっかり得意になった卑猥な言葉で、奏一を挑発して見せ

た。ほっそりとした指を開き癖のついた肉ビラにかけ、ことさらにくちやりと広げる。唾液と愛液に濡れ光る桃色の粘膜を眺め、避妊具が破けそうなほど肉棒がまた膨らんだ。

バクン、バクンとうるさいほどに、心臓が強く鳴っていた。

奏一は自らの根元に手を添えて引き倒し、千弦の処女地に突きつける。

先端が蜜口に触れると、恋人はおびえたように、感じたように、ビクリと身を震わせた。さすがの千弦も気後れを隠せず、浅い息をついて眉根を寄せている。それでも口元にぎこちない笑みを浮かべて、気丈にこくりと頷いて見せる。

「……いくぞ」

奏一は大きく深呼吸をして覚悟を決めた。

「はい……♡——っ」

千弦の細腰に手を添えて、ゆっくりと下腹を突き出していく。

だが——雁首がひしゃげてつぶれるほどの圧力がみっちり侵入を押し阻んだ。

（焦るな……落ち着け……千弦はもつと不安なはずだ……）

結果を急いで無理矢理押し込めたくなるのを自制し、一旦切っ先を引いて膣口の状態を確かめる。桃色の姫園は緊張も露わに、きゅっ、きゅっ、と断続的に引き締まっていた。

これじゃきついのも無理はない。じっくり慣らして十分な潤みをたたえているとはいえず、そもそもが見失ってしまいそうなほど小さな入り口が処女膜によって護られているのだ。

まずは彼女を安心させないと——奏一は恋人の腰にあてがった手を臍の下にずらし、と

ん、とん、と赤子をあやすように叩いた。

千弦がはつと奏一を見る。奏一は笑顔を作つて頷く。彼女の目元がうつとりと蕩け、腹筋のこわばりが徐々に、徐々に緩んでいく。

千弦の吐息がゆつたりと落ち着いたのを見計らい、奏一は再び鈴口を秘裂に押し当てた。勢いをつけすぎないように、肉道から軸がずれないように、細心の注意を払つて腰を繰り出していく。

今度ははつきりと、先端がとば口に突き入る手応えがあつた。びり、と何かが失われる感触。そして、ぐぶ——と。奏一の先端が彼女の胎内へ埋まつた。

「んっ……っううん！」

千弦がびくんと身悶え、艶めかしくもくぐもつた悶え声を零す。連動するように彼女の膣口も握りつぶすような圧力で奏一の亀頭を締めつける。

「奏一さん……どうぞ、奥まで……♡」

それでも衝撃の余韻が醒めぬうちに、千弦は荒い息をつきながら微笑んだ。

いたわりと獣欲がごちゃごちゃに入り交じりながら奇跡的なバランスを保つて身体を操り、奏一はゆつくりと、ゆつくりと、そのままペニスを突き込んでいく。

狭い膣壁を掻き分けながら、肉傘が処女道をかじ開ける。ぞわぞわと腰裏が粟立つような快美が、肉茎にまとわりついていく。やがて先端がくちゅんと最奥にたどり着き——奏一の雄器は根元まで彼女の姫穴に飲み込まれてしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!